

病虫害発生予報 第4号（7月予報）について

令和7年度病虫害発生予報 第4号（7月予報）を別添のとおり発表します。

（補足）

県農作物病虫害防除所では、植物防疫法に基づき、有害動植物の防除を適時で経済的なものにするため、気象、農作物の生育状況、有害動植物の発生調査の結果等を分析し、有害動植物の発生予察及び防除対策に係る情報（発生予察情報）を提供しています。

「病虫害発生予報」は病虫害の発生予測及び防除情報を定期的に発表するもので、本県の場合は4～11月に月1回発表しています。

（連絡先）

担当課室	鳥獣害対策課	農作物病虫害防除所
担当者	松山	岡本
電 話	073-441-2905	0736-64-2300

病虫害発生予報 第 4 号 (7 月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水 稻	いもち病	並	カンキツ	黒点病	並
	紋枯病	並		かいよう病	並
	縞葉枯病	並		ミカンハダニ	並
	ヒメトビウンカ	並		ヤノネカイガラムシ	並
	ツマグロヨコバイ	並		チャノキイロアザミウマ	並
	セジロウンカ	並		ゴマダラカミキリ	並
	トビイロウンカ	並			
	コブノメイガ	並			
ウリ科野菜	疫病	並	カキ	炭疽病	並
	うどんこ病	並		うどんこ病	並
	つる枯病	やや多		円星落葉病	やや多
	炭疽病	並		角斑落葉病	やや多
ナス科野菜	疫病	並		フジコナカイガラムシ	やや少
			モモ	せん孔細菌病	並
野菜全般	アブラムシ類	並		カイガラムシ類	並
	ハダニ類	やや多	果樹全般	カメムシ類	少
	ミナミキイロアザミウマ	並			
	ミカンキイロアザミウマ	並			
	シロイチモジヨトウ	並			

気象予報

近畿地方 1 か月予報 (06/21～07/20)

2025年06月19日14時30分 大阪管区気象台 発表

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 06/21～07/20	天候	平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	降水量	降水量は、少ない確率50%です。
	日照時間	日照時間は、多い確率50%です。
1週目 06/21～06/27	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 06/28～07/04	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 07/05～07/18	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

気 温	近畿地方	10	10	80
降 水 量	近畿地方	50	30	20
日 照 時 間	近畿地方	20	30	50

低い (少ない)
 平年並
 高い (多い)

I. 水 稲

1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0.7%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続きと発生しやすい。

② 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。

③ 常発地や罹病性品種（「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」等）の栽培ほ場では初発時期に注意し、発生がみられたら直ちに薬剤防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における前年9月上旬の発病株率は8.8%（平年13.9%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の本田における前年8月のイネ縞葉枯病の発生ほ場率は0%（平年3%）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市1.6%（平年4.2%）、かつらぎ町1.7%（平年4.3%）であった。

④ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ヒメトビウンカの防除を行う。本虫の第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられる。前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0.2頭（平年0.2頭）であった。

② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平年0.9頭）、上富田町1頭（平年0.4頭）、那智勝浦町0頭（平年1.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した 6 月田植えのほ場では、縞葉枯病の発生が認められる地域以外は 7 月の防除は必要ない。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における 6 月中旬の 25 株あたり生息密度は 0.7 頭（平成 0.8 頭）であった。

② 予察灯による 6 月 1～20 日の誘殺数は、紀の川市 15 頭（平成 18.9 頭）、上富田町 0 頭（平成 1.1 頭）、那智勝浦町 7 頭（平成 7.2 頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 育苗箱施薬剤を施用した 6 月田植えのほ場では、7 月の防除は必要ない。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における 6 月中旬の 25 株あたり生息密度は 0.8 頭（平成 0.5 頭）であった。

② 予察灯による 6 月 1～20 日の誘殺数は、紀の川市 1 頭（平成 2.9 頭）、上富田町 0 頭（平成 4.0 頭）、那智勝浦町 1 頭（平成 11.2 頭）であった。

③ 予察灯への初飛来は、紀の川市 6 月 17 日（平成 6 月 17 日）、上富田町 5 月 3 日（平成 5 月 25 日）、那智勝浦町 5 月 21 日（平成 5 月 28 日）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ツマグロヨコバイに準ずる。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における 6 月中旬の 25 株あたり生息密度は 0 頭（平成 0 頭）であった。

② 予察灯による 6 月 1～20 日の誘殺数は、紀の川市 0 頭（平成 0 頭）、上富田町 0 頭（平成 0.3 頭）、那智勝浦町 1 頭（平成 0.4 頭）であった。

③ 予察灯への初飛来は、上富田町 5 月 22 日（平成 6 月 24 日）、那智勝浦町 6 月 19 日（平成 6 月 27 日）であった。6 月 20 日現在、紀の川市（平成 7 月 17 日）では飛来を認めていない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生ほ場では、出穂前の防除に努める。本虫は株元に多く生息するので、薬剤が株元に届くように散布する。

8. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における 6 月中旬の 25 株あたり被害葉数は 0 葉（平成 0 葉）であった。

② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による 6 月 1～20 日の誘殺数は 0 頭（平成 0 頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第 1 世代の発蛾最盛期は平成 7 月下旬頃である。防除適期は、粒剤の場合は第 1 世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル

等) の場合は第 2 世代幼虫発生時期 (第 1 世代の発蛾最盛期の 7 日後) である。

- ② 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位 2 葉の被害葉率が 40% になると 10% 程度減収する。それ以降の被害は被害葉率 80% 以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

※ 水稻害虫の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稻害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

Ⅱ．野 菜

＜ウリ科野菜＞

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 2%) であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

3. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年：発生ほ場率 1%、発病葉率 0.01%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 11% (平年 1%)、発病葉率 0.3% (平年 0.01%) であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

4. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年：発生ほ場率 5%、発病葉率 0.2%) であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 17% (平年 21%)、発病葉率 0.3% (平年 2.1%) であった。
- ③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病した茎葉や果実は、ほ場外に持ち出す。
- ② 降雨日が連続すると多発する可能性があるので、長雨が予想される場合は予防散布を実施する。

＜ナス科野菜＞

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける 6 月下旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。
- ② 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨前の予防散布に努める。予防散布ができなかった場合は降雨後に早急に防除する。
- ② ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける 6 月下旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は 11% (平年 7%)、生息葉率は 0.1% (平年 0.6%)、ワタアブラムシの発生ほ場率は 11% (平年 15%)、生息葉率は 0.1% (平年 1.0%) であった。
- ② 県中部の露地および施設栽培スイカにおける 6 月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は 62% (平年 81%)、生息葉率は 9.2% (平年 8.9%) であった。
- ③ 黄色水盤 (紀の川市) による 6 月 1～20 日の誘殺数は 44 頭 (平年 108.1 頭) であった。
- ④ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける 6 月下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は 67% (平年 30%)、生息葉率は 5.1% (平年 4.7%)、ナミハダニの発生ほ場率は 0% (平年：発生ほ場率 7%、生息葉率 1.3%) であった。
- ② 県中部の露地および施設栽培スイカにおける 6 月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は 46% (平年 49%)、生息葉率は 13.7% (平年 9.5%)、ナミハダニの発生ほ場率は 38% (平年 5%)、生息葉率は 2.9% (平年

0.7%)であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける6月下旬の発生ほ場率は33%（平成19%）、生息葉率は1.7%（平成5.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける6月下旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率3%、生息葉率0.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培スイカの6月中旬の発生ほ場率は23%（平成39%）、被害果率は0.8%（平成4.8%）であった。

② フェロモントラップによる6月1～20日の誘殺数は、紀の川市50頭（平成18.2頭）、御坊市103頭（平成47.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。

② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は17%（平成14%）、発病果率は3.3%（平成1.8%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、散布後の累積降水量が 200～250mm となった時点または 1 か月を経過した時点のどちらかの早いタイミングで次の散布を行う。
- ② 過乾燥等で樹勢が衰弱すると伝染源の枯枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月中旬の春葉での発生ほ場率は 14%（平年 21%）、発病葉率は 1.0%（平年 0.9%）であった。

② 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 罹病枝葉は果実への伝染源になるので剪除する。

② ミカンハモグリガの食害痕は病原菌の侵入口となるため本害虫の防除を徹底する。

③ 罹病性品種では強風雨前に薬害軽減のための措置を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。

④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月中旬の発生ほ場率は 34%（平年 30%）、発生葉率は 9.3%（平年 10.2%）、100 葉あたり雌成虫数は 31.3 頭（平年 28.6 頭）であった。

② 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に 2 回以上使用しない。

② 薬剤抵抗性対策として 97%・98%マシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすい。また、7 月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は 7 月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月中旬の発生ほ場率は 0%（平年 0%）であった。

② 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6 月下旬に防除できなかった発生ほ場では、7 月上旬に 97%・98%マシン油乳剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月中旬の発生ほ場率は 2%（平年 0%）、寄生果率は 0.1%（平年 0%）であった。

- ② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる 6 月 1～20 日の誘殺数は、由良町 73 頭（平年 193 頭）、有田川町 118 頭（平年 124 頭）であった。
- ③ 7 月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月中旬の発生ほ場率は 0%（平年 2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 成虫の捕殺に努めるとともに、薬剤を散布する。
 - ② 発生の多いほ場では、7 月中旬以降に成虫の産卵防止および幼虫対象の防除として薬剤を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における 6 月中旬の新梢での発生ほ場率は「富有」0%（平年 1%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年 0%）であった。発病新梢率は「富有」0%（平年 0.0%）であった。
 - ② 7 月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
 - ② 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかる。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における 6 月中旬の発生ほ場率は「富有」44%（平年 49%）、「平核無」・「刀根早生」18%（平年 18%）であった。発病葉率は「富有」1.6%（平年 2.3%）、「平核無」・「刀根早生」0.3%（平年 0.7%）であった。
 - ② 7 月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。
 - ② 盛夏期には一時病勢は停滞するが、好適な気象条件やほ場条件で秋季まで二次伝染を繰り返すので、必要に応じて薬剤散布を行う。

3. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年 10 月の「富有」における発生ほ場率は 25%（平年 41%）、発病葉率は 5.9%（平年 3.3%）であった。
 - ② 県北部では感染時期である 5 月上旬から 6 月上旬にかけて降水量が平年並～かなり多く推移した。
 - ③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次伝染はしない。
- ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は94%（平成70%）、発病葉率は15.2%（平成11.8%）であった。
- ② 県北部では感染時期である5月上旬から6月上旬にかけて降水量が平成並～かなり多く推移した。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次伝染を繰り返す。
- ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発生ほ場率は「富有」6%（平成13%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平成3%）であった。寄生果率は「富有」0.1%（平成0.6%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平成0.1%）であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期である。
- ② 紀の川市粉河における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月下旬頃であり、回目の防除適期は8月上旬頃と思われる。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発病葉の発生ほ場率は70%（平成78%）であった。発病葉率は4.9%（平成5.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風対策に取り組む。防風ネット、防風樹設置ほ場では保守点検を行う。
- ② 翌年の伝染源軽減のため、秋季に無機銅水和剤を散布する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ・クワシロカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ）の寄生枝の発生ほ場率は0%（平成5%）、寄生枝率は0%（平成0.2%）であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期から1週間以内に薬剤散布を実施する。
- ② 県北部の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが6月30日前後、クワシロカイガラムシが7月9日前後と予想される。ナシマルカイガラムシは、7月21日～8月5日頃である。ほ場の主な発生種に合わせて薬剤散布を行う。

＜果樹全般＞

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市粉河の予察灯における6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが91頭（前年2,740頭、平成367頭）、ツヤアオカメムシが68頭（前年7,225頭、平成927頭）であった。
- ② 有田川町奥の予察灯における6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが1頭（前年6,154頭、平成662頭）、ツヤアオカメムシが4頭（前年2,914頭、平成409頭）であった。
- ③ みなべ町東本庄の予察灯における6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが115頭（前年1,931頭、平成463頭）、ツヤアオカメムシが232頭（前年3,448頭、平成1365頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きく、山林隣接ほ場では被害が出やすい傾向がある。
- ② カキでは「富有」で被害が大きいため、特に注意が必要である。
- ③ モモは袋がけを行っていても果実が肥大して袋に密着すると袋の上から吸汁されるので、園内の発生状況をよく観察し、発生があれば薬剤散布を行う。除袋後は特に注意が必要である。
- ④ 今後の発生動向については、農林水産部鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ ＜農作物病虫害防除所＞

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ ＜わかやま県政ニュース＞

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780